

分布空白地域との関係について、次年度以降の調査で更に検討を重ねていきたい。

計画 5-2

伊豆大島の外来マカク種に関する遺伝学的研究

佐伯真美（上智大・院・理工）

伊豆大島には戦前、動物園から脱走し野生化したサルが生息しており、現在、島のほぼ全域で群れの生息が確認されている。しかし、脱走したサルの種については諸説あって定かにはされてこなかった。そこで、島内に生息するサルの種を遺伝学的に同定することを主な目的に、野外で採取した 24 のサルの糞試料が分析された。糞表面に付着する腸管上皮細胞から抽出されたミトコンドリア DNA の D-loop 領域から 202 塩基配列が解読された結果、24 試料は全てタイワンザルタイプと判定され、これら 24 試料は 2 箇所の置換サイトから A・B の 2 タイプに区別された。また、これら 2 タイプの分布は地理的に偏りがあり、動物園を境に A タイプは時計回りに、B タイプは反時計回りに分布拡大したように観測された。そこで本研究では、①脱走したサルの種、および②群分裂を介した分布拡大の経緯、を遺伝学的に明らかにすることを目的とした。

本研究期間中に分析した 81 の試料のうち、78 試料はタイワンザルタイプであり、これらは先行調査で確認された A・B タイプのいずれかであった。残る 3 試料については他の外来マカク種である可能性が示唆されたが、今後の分析によって検討する必要がある。

遺伝子タイプの地理的分布状況については、A・B の 2 タイプは動物園の南約 1 km 付近を境に、A タイプは南部に、B タイプは北部および西部に分布が偏っていた。また、島の南東部では両タイプが複数例混在していた。試料数の少ない南西部では、反時計回りに分布拡大した可能性の高い B タイプが数例検出され、他の外来マカク種の可能性がある 3 試料についても南西部でのみ検出された。分布拡大状況については、B タイプが反時計回りに広く拡大した可能性が示唆されたが、試料の少ない南西部地域を含め今後の分析で検討する。

計画 5-3

熊本県に生息する野生ザルの個体群管理に向けた遺伝的モニタリング法の開発

藤井尚教（尚綱大・文）

熊本県内において野生ザル集団が生息している球磨地域から 35 個の糞とサルの耳や尾を 16 個と、阿蘇地域からサルの糞 9 個を公共団体の協力のもとで採取した。

この糞の中から、球磨地域 13 個、阿蘇地域 3 個の計 16 個を選び出しミトコンドリアの DNA 抽出を試みたが、7 個（球磨地域 5 個、阿蘇地域 2 個）で成功した。

この 7 個は球磨地域と阿蘇地域の地域固有なハプロタイプで綺麗に二つに分けられた。

球磨地域は人吉盆地を東西に流れる球磨川によって南北に分けられ、北の五木相良地区と南の宮崎県境に接するあさぎり町皆越地区のサルの DNA は同じタイプの（41-1）型であった。

一方阿蘇地域では阿蘇南郷谷を東西に流れる白川を南北にはさむ久木野村と白川の集団で同じ DNA タイプの（40）型であった。

（41-1）型は鹿児島県や宮崎県に見られる南九州型であり、（40）型は大分県や福岡県に見られる北九州型である。両者の境界線が熊本県のニホンザル地域個体群を二分しているといえよう。

これらのタイプがさらに細かいサブタイプに分類できるかは、今後の実験で検討を進めたい。なお上記の分析試料以外にも、今年度は球磨群の駆除個体から相良村で 9、あさぎり町で 6 の皮膚標本を採